

26. 11. 13. 下野新聞

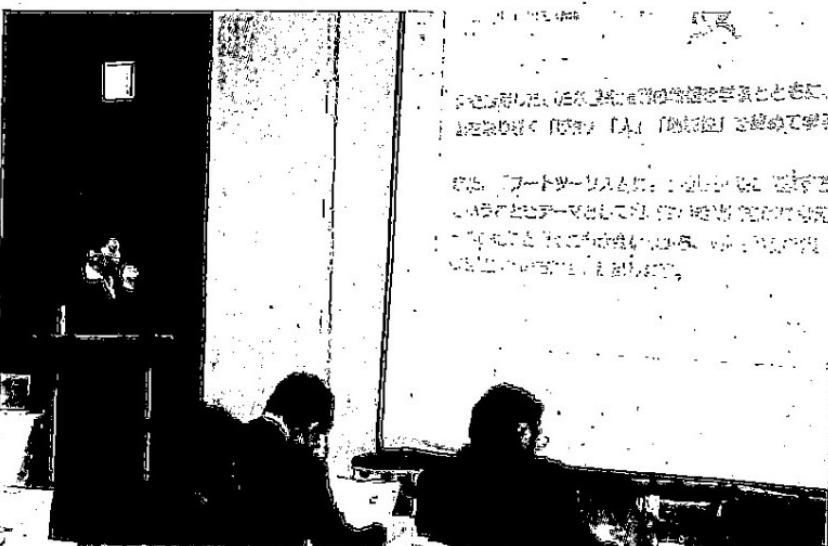
足利で両毛東武沿線活性化協議会開催

五輪見据え誘客強化

学生ら提言で構想見直し

【足利】東武鉄道と沿線の両毛7市で構成する両毛地域東武鉄道沿線活性化協議会は11日、市内のホテルでプロジェクトチーム会議を開き、2020年の東京五輪・パラリンピックに向けた誘客策を本格化させることを確認した。

会議では「そば、うどんなどの粉もの文化」を7市連携でPR、「茨城空港からの直行バスの運行を」などの提言があつた。これらを踏まえ、同協議会は05年に策定された東武鉄道沿線活性化構想の見直しを進める方針。
（柴田正人）



両毛地域の観光について提言する日本学生観光連盟のメンバー（左）

同連盟顧問の鈴木勝樹美林大教授は、茨城空港からの直行バスの運行や、鉄道、バスの乗車、ミュージアムの入場を1枚で済ませる「リョウモウ・パス」の導入などを提言し、「在日留学生に両毛を知らしめる工夫も必要」と語った。

25大学が加盟する日本学生観光連盟と提携。同連盟は7月に両毛各市を訪れ、課題や改善策をまとめた。報告会はこの日の同協議会で行われ、①若者が魅力を感じるイベントが少ない②両毛の知名度が低い――などが課題として示された。これらを踏まえた提言は①スイーツなど新たな粉もの製品を作り地元の若者が宣伝する②7市が連携し宿泊手形を作り長期滞在を促すなどがあげられた。

東武鉄道と沿線7市（足利、佐野、群馬県太田、桐生、館林、みどり、伊勢崎各市）は1988年、沿線開発を目的に沿線開発推進

協議会を設立。2005年、かう臨時列車「両毛地帯号」を運行させる事業な

ど、首都圏の大学を中心によ

どを展開してきた。

本年度は、東京五輪に向

けた誘客策を外部から若者の視点で提言してもらおう

と、首都圏の大学を中心によ

「粉物文化」の全国発信を

日本学生観光連盟、食べ物観光で提言

両毛地域の調査結果報告

東武沿線活性化協

両毛地域東武鉄道沿線活性化協議会のプロジェクトチーム会議（リーダー・池澤昭足利市副市長）が11日、足利市内のホテルで開かれ、全国の大学生でつくる日本学生観光連盟（大川周良代表）が「両毛地域を対象としてフードツーリズムの視点からのフィールドワークの結果報告」を行った。報告では両毛

地域の活性化策として「若者の観光目線を取り入れ、地域を見直すことなどを提案した。

また、同連盟顧問で美林大学教授の鈴木勝さんが「2020年に向けた観光誘客による地域活性化」をテーマに講演した。

20人が実際に館林、足利、桐生の各市に入り、体験、調査などを実施。

調査結果では、両毛地域がうどん、そばなど「粉物文化」があることを指摘。さらにそれをPRするために位置付け実施したも

の。同連盟では「フードツーリズムによる地域観光に貢献する」をテーマにフィールドワークを7月に実施。

20人が実際に館林、足利、桐生の各市に入り、体験、調査などを実施。

同連盟は観光を学ぶ

ルドワーク結果を報告

する日本学生観光連盟の役員（足利市内で

観光場面で学習活動や社会貢献を行うことを通して、観光の新たな可能性を求めてることを目的に活動している。

また同協議会は桐生

市、伊勢崎市、太田市、館林市、みどり市、佐野市、足利市の市長、市議会議長、商工会議所会頭と東武鉄道関係役員で組織。両毛地域と東武鉄道の協調・連携により、両毛地域の活性化推進を図ることを目的に活動を進めている。

提案があつたことや「両毛7市合同で両毛地図を作成する」など

の提案を行つた。

また今後、同連盟と

して地域の大学生と連

盟の学生とが協力した

プロジェクトを行うこ

となどを計画している

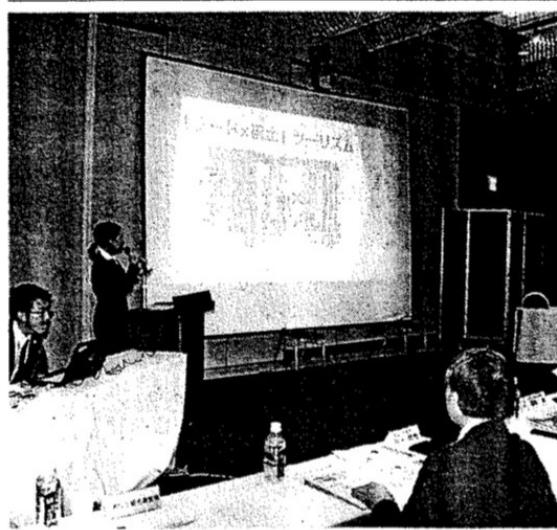
とした。

同連盟は観光を学ぶ

ルドワーク結果を報告

する日本学生観光連盟

の役員（足利市内で



どちらが発

県境越えた地道な活動を

東武鉄道伊勢崎線万5千人（12年度）で、ここを通じて同連盟は、同地域の沿線の両毛7市（足利、佐野、群馬県太田、桐生、館林、みどり、伊勢崎各市）が、ほか、絹織物業にかかる歴史的な建造物が集積する桐生

輪、パラリンピック市（桐生新町重要伝統的建造物群保存地区など）、地域内に取り組むことになった。

7市と同鉄道で構成する「両毛地域東武鉄道沿線活性化協議会」が近く、見直し作業を進める沿線活性化構想には、五輪を見据えたビジョンを掲げる予定で、同地域の強みを生かした官民一体の活動を期待したい。

7市の観光客入り込み数は、本県側の2市が計約1131万9千人（2012年）、群馬県の5市が計約1518

数年、ほぼ横ばいとなつていている。佐野プレミアム・アウトレットや足利学校、鑑阿寺の別化、若さ、7市合体の観光マップなどを挙げた。

2020年の東京五輪、パラリンピックに向けて、連携して誘客事業に取り組むことになった。

両毛地域は県境を挟んで位置しているが、各商工会議所の会頭が定期的に会議を開催

在日留学生へのPRを発端とした外国人誘致、継続した外国語による情報発信などを提言し、「両毛だけでなく東京や近隣広域圏との連携も必要」と呼び掛けている。

観光施策は答えが出るまで長い時間が必要とされる。東京五輪に向け全国の自治体や地域と差別化を図るために、地域で継続的な取り組みが必要なのは言うまでもない。

若者の視点で誘客策を提言してもらおうと、同協議会が本年度提携した日本学生観光連盟（首都圏などの25大学が加盟）のメンバーも、訪問前の両毛地域を「どこにあるのかわからない」「何もイメージがわかなかった」などとの印象で見ていたという。視察

するなど企業活動や生活面での結びつきは強い。誘客事業は県境の壁をいかに乗り越えるかが鍵となりそうだ。

同協議会は今後、受け入れ態勢の整備に加えて、都内や空港から観光客を呼び込むための施策を本格的に検討する。同連盟顧問でJTBワールド取締役などを歴任した鈴木勝（さち）櫻美林大教授は、茨城空港からの直通バスの運行や